香川医療生活協同組合

第23号
（部内資料）

高松平和病院ニュース

〒760-8530　高松市栗林町1-4-1　TEL.087(833)8113(代表)　HPアドレス：http//www.t-heiwa.com/
発行責任者：高松平和病院 院長 蓮井宏樹　編集：広報委員会　発行年月日：2017年１月１日

2017年 初春のご挨拶

高松平和病院
院長　蓮井宏樹

皆様　明けましておめでとうございます。

昨年は当院への温かいご支援やご指導を賜りありがとうございました。

2016年を振り返ると、４月に1982年に整形外科を創立して以来の手術件数が10,000件に達しました。今後も需要が増加する整形疾患への対応に、当院の特徴であるリウマチ医療とともにさらなるレベルアップを重ねつつ取り組んでいきます。

５月には「第17回日本死の臨床研究会・中四国支部会」を主幹病院として開催し、250名の参加で緩和ケア分野の中四国各地での実践や研究の交流ができました。これからも地域でのニーズに応え、緩和ケア・緩和医療の発展に貢献していきたいと思います。

７月には地域医療セミナーを開催し、二人の講師の先生から香川県、高松市の医療・在宅療養推進事業の取り組みや高知市内の病院と在宅支援診療所の連携グループ【じきいくネット】の経験を学びました。34医療機関から100名を超える参加で大いに盛り上がり、当院が果たす上流と下流をつなぐハブ病院としての役割について深めることができました。

医師の研修と養成の点では当院での研修プログラムをへてはじめての日本プライマリケア連合学会認定・家庭医療専門医が誕生しました。医療生協の院所として健康増進の視点を持ち、個人だけでなく地域の健康問題を発掘し改善できるよう力を発揮して取り組んでいきます。

さて、昨年４月に診療報酬の改定があり、病床の機能別再編への誘導がさらに強化されその対応に苦労した医療機関も多かったのではないでしょうか。安倍政権は2025年の医療介護提供体制改革に向けて2016年からの３年間を「改革集中期間」と位置づけ、医師養成も含めた医療介護提供体制の改革・統制を進めようとしています。「上流改革（二次診療圏の病院・病床の4つの機能分化）」、「下流改革（中学校区の地域包括ケアシステムの構築）」を掲げ、香川県でも地域医療構想が作定されましたが、上流から下流改革の受け皿である在宅医療や介護体制などの整備の遅れは深刻で、このままでは“川下”の決壊や逆流は必至との見方もあります。

当院は今年も地域医療における連携を強め、できることを精一杯努力していく所存です。ひき続き皆様のご協力ご支援のほどお願い申し上げます。

高松平和病院 理念

1. 患者の権利を守り常に信頼される医療を提供します。
2. 健康づくり、明るく安心して暮らせるまちづくりに貢献します。
3. 平和と医療、福祉を守ります。

HPH取組発表会を行いました

こんにちは、高松平和病院内科・家庭医療科の佐藤と申します。当院は2015年度に、国際HPHネットワークおよび日本ＨＰＨネットワークに登録しました。ＨＰＨとはHealth Promoting Hospital and Health servicesの略で、WHOが「人々が自らの健康とその決定要因をコントロールし、改善することができるようにするプロセス」と定義するヘルスプロモーションを実践する医療機関およびそのサービスを指します。「地域をまるごと健康にする病院」ということですが、実は医療生協の活動はもともとヘルスプロモーションの要素を多く含んでおり、WHOでも高く評価されています。特に組合員・友の会を中心にした地域住民への健康運動・居場所作りが好評のようです。病気だけでなく、地域をまるごとみたくて家庭医に進んだ私にとっては、とてもやりがいのある領域です。そんな訳で院内HPH委員会が立ち上がりました。職員にもHPHを実践してもらうため、各職場でHPH活動を行ってもらい発表会を行いました。各職場から合計14演題のエントリーがあり、創意工夫を凝らした発表がありました。「地域への働きかけ」「活動の見せる化」を基準に審査し、「患者・地域へのadvanced care planningのすすめ」（緩和ケア病床）、「胃カメラ・大腸カメラフォロー対象者への案内状郵送」（内視鏡室）を表彰しました。その他、職場でのラジオ体操を通じてコミュニティが広がったり、健診でのアンケートから業務改善に繋がりリピート率が上がった、などが注目されました。次は職員の禁煙率を上げたい、もっと地域に飛び出したい、という野望をもっております。このような活動を通じ、病院まるごと・職員まるごと・地域まるごと健康にしていく拠点になっていきたいと考えておりますので、今後ともよろしくお願い致します。

（内科・家庭医療科　佐藤 龍平）

HPH表彰式

第23回看護介護活動研究交流集会を終えて

第23回看護介護活動研究交流集会が、11月23日に綾歌総合文化会館アイレックスにて、113名の法人内の看護師介護士ケアマネジャー等が参加し開催されました。

演題発表では、私たちが大切にしている民医連の看護や介護の実践を事例研究されたものや日々の業務からの質的研究など18演題が発表されました。急性期看護としてせん妄患者への介入、患児の育児支援、口腔ケアの意識調査、回復期からは独居や高次脳機能障害をテーマにしたチームアプローチや退院支援についての取り組みがありました。また維持期として、在宅支援や病院との連携、外来での検査の安全性や禁煙外来の取り組み、老人介護保健施設からは在宅復帰強化型への取り組みやワークライフバランスについて、終末期の緩和ケアでは患者の真の要求の探究や退院支援、訪問看護師による看取りについてのアンケート調査等、幅広い研究がありました。

記念講演では、鳥取大学大学院医学系研究科講師の竹田伸也先生に、「マイナス思考を手なずける認知療法入門」と題して、陥りやすい認知のゆがみや考え方の幅を広げる認知行動療法について、ご講演いただきました。先生のユーモアを交えながらの講演は楽しいだけではなく、自分の考え方のクセを改めて知る機会となりました。

交流集会は、普段交流できない事業所の活動内容を知ることもでき、新しい知見を得ることのできた1日でした。

（学術委員会　山本 亜紀）

紹介します

初めまして、今年の９月から高松平和病院に勤務しております３年目の医師の植本一駿（うえもと　かずとし）といいます。１，２年目は岡山県倉敷市の水島協同病院というところで研修をしておりました。３年目は９月まで香川県立中央病院にて勤務しておりましたが縁あって平和病院で勤務しています。仕事に関しては徐々に慣れている最中で分からないこともまだまだありますが、なんとかやっています。むしろ自分が過ごしやすいようにほしい器具や物品の請求をするのですが、割とすんなり通っていくことがとても不思議に思いながらありがたいな、と感じています。

今後は消化器内科を中心に他分野の疾患についても幅広く見れる医師になりたいと考えております。また１月からは往診も始まり、家から病院まで患者さんと長くつきあえる医師になれるよう頑張って参ります。

個人的な事に関しては今年子どもが生まれる予定なのでとても楽しみな気持ちで待ち遠しく思っています。また、僕と妻の誕生日も１月なので今後は１月が様々な行事と重なって忙しくなるのではとも思います。大部分個人的な話で申し訳ありませんが、以上を自己紹介とさせて頂きます。御迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、今後ともよろしくお願い致します。

（後期研修医　植本 一駿）

職場紹介

食養科

食養科は、管理栄養士３名･調理師７名の計10名で患者様の給食、栄養管理を行っています。当院には、NST（栄養サポートチーム）があり、栄養状態が悪い患者様のために食事の個別対応を行っています。嚥下障害がある方には、ソフト食やとろみをつけた食事を提供したり、噛む事が難しい方には、おかずを刻んだりペースト状にしたりと様々な要望にお答えしています。また、お食事の満足度を上げるため年２回の嗜好調査を行い、患者様の意見を病院食の献立へ反映しています。今までの嗜好調査では、「うどんをもっと食べたい、お寿司が好き」などの意見があり、以前よりうどんお寿司をお出しする回数を増やしたりしました。病院食は厚生労働省の定める、日本人の食事摂取基準にそって作る必要があるため、塩分量などの制限があります。そのため、だしをしっかり取ったり調理法を工夫し、薄味でもおいしいと言われるよう食養科一同、日々試行錯誤しています。季節ごとの行事食では、ゼリーやケーキを手作りし、入院中のちょっとした楽しみにつながればと考えています。これからも、患者様の要望に少しでも応えられるよう、職員一丸となって頑張っていきますのでよろしくお願いいたします。　（食養科　舩本 忍）